

F.V. Dickins と『仮名手本忠臣蔵』の英訳

—— 英学史的考察 ——

川 村 ハ ツ エ

はじめに

Donald Keene (1922—) の『仮名手本忠臣蔵』の英語の完訳 *Chūshingura (The Treasury of Loyal Retainers), A Puppet Play by Takeda Izumo, Miyoshi Shoraku and Namiki Senryu* は1971年に Columbia University Press から出版され、その後1981年に Tuttle Co. から復刻されたが、現在はいずれも絶版になっている。Keene はその Introduction で次のように述べている。

Reputation of the Play

Chūshingura was an immediate success. First performed as a puppet play, it was almost immediately staged by the Kakuki actors in both Osaka and Kyoto, and soon afterwards no fewer than three companies were performing it in Edo. Ever since it has continued, in one form or another, to captivate Japanese audiences, despite the changes in Japanese society and moral ideals. It has also proved of great interest even to non-Japanese audiences when performed abroad, and was probably the first work of Japanese literature to be translated. A version in colloquial Chinese was published in 1794, and from 1880 translations into English, French and German began to appear. (p. 25)

そしてその脚註のところで、Frederick Victor Dickins の忠臣蔵英訳に触れた。

See *Japanese Literature in European Languages*, pp. 39-40, for a list of translations. The oldest seems to be the one by Frederick Victor Dickins called *Chiushingura: or The Loyal League*, published in 1880. (p. 25)

ここで Keene が言及している Dickins の英訳忠臣蔵はロンドンで1880年に出版されたものを指していると思われる。そしてそのロンドン版には new edition と書かれている¹⁾が、実はすでに Dickins は 1875(明治8)年に、横浜で天琴寿という漢字名を附した『仮名手本忠臣蔵』の完訳本を出版した。B. H. Chamberlain が「王堂」と自ら称したように、Dickins も「天琴寿」と Dickins の音を漢字に移して使用していたようである。

(1)

CHIUSHINGURA or THE LOYAL LEAGUE: A Japanese Romance 忠臣蔵 天琴寿訳
明治八年 横浜

この明治8年(1875)という表記のある「天琴寿訳」の横浜出版の本は、そのまま改訂なしで1876年 New York から再版されている。

CHIUSHINGURA or THE LOYAL LEAGUE : A Japanese Romance

Translated by Frederick V. Dickins with Introduction by Hoffman Atkinson, New York G.P. Putnam's Sons 1876

その後、東洋文庫所蔵の目録だけ見ても、1892年横浜で 3rd Edition が出ており、ロンドンでは1880年のあと1912年にも再版されている。

New York (1876) 版にある Hoffman Atkinson の Introduction によれば、*Forty-Seven Ronins* の物語は Mitford の *Tales of Old Japan* によって英語圏の読者に知られていたという。*Tales of Old Japan* の出版は1871年、Hoffman Atkinson についてはまだ調べがついていない。

Algernon Bertram Freeman Mitford (1837-1916) はイギリス外交官で1886-1870(慶応2-明治3)年をパークス公使の下、Satow, Aston らと共に日本に勤務し、王政復古の際には明治政府と折衝した。語学に長じ、日本赴任後、Satow に日本語を学び、日本に関する著作は多いが、その中でも *Tales of Old Japan* は広く知られている。²⁾

Tales of Old Japan の冒頭に *The Forty-Seven Ronins* の「四十七士物語」が入っているが、これはいわゆる赤穂浪士の仇討ち物語でたいへん読み易い英語で書かれている。

この「四十七士物語」だけが取り出されて単行本となり、*The Tale of Forty-Seven Ronins : Mitford* と筆記体の書名となって、明治25年東京の内田老鶴圃から出た。

一体どのような経過を辿って、明治8年横浜版、「天琴寿訳」の『仮名手本忠臣蔵』の本格的な英訳 *CHIUSHINGURA* が誕生したのであろうか。

(2)

忠臣蔵の翻訳に着手

日本アジア協会紀要に次のような記載がある。

In 1862, Ernest Mason Satow (1843-1929) arrived in Yokohama to take up Japanese as the first in what was to become a long and distinguished line of student-interpreters of the British Legation and was joined two years later by William George Aston (1846-1911). Also at the British Legation from 1866 to 1870 was a secretary who became proficient in Japanese even though his duties did not require that he do so, Algernon Bertram Mitford (1837-1916), later known as Lord Redesdale. Frederick Victor Dickins (1838-1915), a medical officer with the British Navy who was stationed in Yokohama from about 1863 to 1866, was another who learned the language out of personal desire.³⁾

これによって、Dickins が英国海軍軍医将校として最初に来日した当時、錚錚たるジャパノロジストたちが競い合っていたことがわかる。

Dickins は1866年に一旦帰国して、ロンドン大学で法律を学び、1870年に再び来日したらしい。⁴⁾ 先ず帰国した年に『百人一首』の英訳本、*HYAK-NIN-IS'SHIU* (1866) をロンドンで出版した。⁵⁾ Dickins は *CHIUSHINGURA* の Appendix に次のような記載をした。⁶⁾

The following attempt at a versified rendering* claims the indulgence of the reader. The translator has endeavored to preserve, as far as possible, the spirit and even the letter of the

original, although at the risk of roughness being perceptible in the execution of his task ; but as the point of the text often lies in an untranslatable play upon words, he has been obliged in one or two instances to omit, and in others to modify or amplify portions of the interlude.

*It first appered in an article by the translator in *the Westminster Review* for October, 1870 ; but in republishing it here, he has carefully revised, and, where necessary, altered the first version.

ここで、英訳の初稿を1870年に *Westminster Review* に掲載したと言っており、また次のようにも述べている。⁷⁾

The translation, it should be premised, was made long since, in Europe, without the possibility of assistance ; and although it has been revised with as much care as the limited leisure and still more limited scholarship of its author have permitted, there are, doubtless, numerous inaccuracies to be detected in it by those better versed in the language and literature of Japan than himself : for which an indulgent consideration is claimed.

ここでも助けの可能性すらない状況で、ずっと前にヨーロッパで翻訳したと言う。更に日本アジア協会紀要には、Introduction の中に次のような注目すべき記載がある。⁸⁾

Meanwhile, in Yokohama, John Reddie Black, former editor of the *Japan Gazette*, began in 1870 a monthly magazine, *The Far East*, which later moved to Shanghai and lasted until 1878. Though it printed Japanese legends, sketches of Japanese personalities, Dickins' translation of the drama *Chushingura*, which subsequently was published in book form, and a history of the Tokugawa dynasty by an unidentified Japanese, it was primarily a popular magazine which specialized in photographs — real photographs pasted onto its pages — of Japanese and Chinese scenes and customs and made no pretense of being a medium for scholarly works.

ここでは1870年以降、*The Far East* 誌に Dickins の英訳忠臣蔵が掲載されていたことを示している。*The Far East* の editor であった John Reddie Black (1816-1880) はイギリスのジャーナリストで、オーストラリアの帰途、横浜に上陸したまま、日本に滞在してしまった。*Japan Herald* 紙の主筆になり、横浜で *Japan Gazette* 紙を発行 (1867 : 慶応3), のちに月刊雑誌 *The Far East* (1870 : 明治3) その他を発行し、横浜で病没したことが知られている。⁹⁾

以上3種類の記録から、Dickins の忠臣蔵の草稿は、すでにイギリスへ一旦帰国していた間に大体出来上っていたことがわかってくる。

Dickins は第1回目の来日中に、忠臣蔵に対して特別な関心を抱き、赤穂浪士事件を調べていたに違いない。必要な資料を収集した上で、1866年に帰国し、ロンドン大学で法律を学ぶかわら、『百人一首』の英訳出版 (1866) に続く日本研究の第2弾として、忠臣蔵の英訳を始めていたらしい。しかも Mitford の赤穂浪士物語 *Forty-Seven Ronins* よりも本格的な研究書として、『仮名手本忠臣蔵』の完訳を手がけたものと思われる。

(3)

CHIUSHINGURA の構成

1870年頃、Dickins は弁護士資格を取って再び来日し、横浜に居留する。1872年には横浜で日本アジア協会が設立され、Dickins は最初から会員となって活躍する。一方弁護士としても、マリア・ルーズ号のペルー側弁護士として勇名を馳せた。日本人が裁判における弁護士活動の有用性に気づいたのは、Dickins の活躍を眼のあたりに見たからであったという。¹⁰⁾

とにかく、Dickins が横浜で忠臣蔵の本格的な翻訳 *CHIUSHINGURA or THE LOYAL LEAGUE* を出版したのは明治8 (1875)年のことであった。

その構成は次のようになっている。

○ Introduction—Hoffman Atkinson

*Forty-Seven Ronins*の話はMitfordの *Tales of Old Japan*で英語の読者に知られている。しかしこの Dickins の翻訳は『仮名手本忠臣蔵』の原典に忠実に従って11段構成になっており、原典の精神をそこなうことなく訳出しようとした。そしてその困難な仕事を見事に成し遂げた。

○ Translator's Note

i 『忠臣蔵』は日本で最も人気があり、最もよく知られている物語である、少なくとも今まではそうであった。その理由は簡単だ。1868年古い秩序が崩壊するまで忠義は武士階級の最高の美德であった。そしてこの物語の主題がその美德を称揚することにあつたからである。『忠臣蔵』は物語としても巧みに構成されており、事件の多様な点から見ても、当時の煽情的な小説の読者をも引きつけるに十分だ。

ii 『忠臣蔵』というタイトルはほとんど翻訳が不可能だ。日本人は言葉遊びが好きな実例とも言える。「忠臣」は loyal-heartedness の意味か、loyal followers の意味か、そのいずれかであろう。「蔵」は金庫か倉庫の意味と、この物語の主人公の蔵之助の前半部を掛けている。従って原典のタイトルを翻訳しようとはせず、*The Loyal League* とした。その方がこの物語の性質と精神を可成りよく伝えることになるだろう。

iii この翻訳は助けの可能性を期待さえ出来ない西洋にいて、ずっと以前に仕上げたものだ。その後、限られた時間と限られた学識で推敲はしてみたけれども、日本語と日本文学に精通した人々から見れば不正確な箇所が無数に見つかるかも知れないが、おお目に見て頂きたい。

iv この翻訳はごく普通に流布している縮刷版を部分的に採用したところもあるが、大部分は浄瑠璃 joruri 本を底本として訳出した。

v 英語の読者にこの物語をわかって貰うため、原文にない説明を付け加えたところもある。また逆に理解をさまたげると思ったところは故意に削って、簡略化したりした。

以上が翻訳者 Dickins のコメントの概要である。巻末の附録に変体仮名書体の浄瑠璃テキストの一部を載せているが、それを読み解いて翻訳したのであろう。明治初期のジャパノロジストたちはみなそうであったに違いないが、現在では想像もできないほど凄いことであった。

○ 翻訳 (仮名手本忠臣蔵)

大序 鶴ヶ岡八幡宮の場¹¹⁾

Book the First What happened at Tsuruga-oka

二段目 桃井館の場

Book the Second The Rage of Wakasanoske (-suke の u 抜け)

三段目 足利館門前進物の場

同 殿中松の間の場

Book Third The Quarrel of Yenia with Moronawo
(the 脱落)

四段目 扇ヶ谷塩冶館切腹の場

同 表門の場

Book the Forth The Seppuku of Yenia Hang'wan

五段目 山崎街道鉄砲渡しの場

同 二つ玉の場

Book the Fifth The Night Adventure of Kampei

六段目 与市兵衛内勘平切腹の場

Book the Sixth The Heroism of Kampei

七段目 祇園町一力の場

Book Seventh The Discomfiture of Kudaiu

(the 脱落)

八段目 浄瑠璃 道行旅路の嫁入

Book Eighth Translator's Note

(the 脱落)

この段は本蔵の妻と娘が江戸から京都へ向う旅の単なる metrical description であり、この旅の目的は次の段を読めば明白なことだ。この原文の韻文訳は附録 Appendix に収録したのでそれを見てほしい。その韻文訳をここに入れると、物語の筋の進行をそこなうことになると思う。

九段目 山科閑居の場

Book Ninth The Repentance of Kakogawa Honzo

(the 脱落)

十段目 天川屋の場

Book the Tenth The Proof of Gihei

十一段目 高家討入の場

Book the Eleventh Retribution

このように英語の見出しの方が、日本語の原文よりも、筋の流れがわかるようになっている。翻訳も Translator's Note で言っている通り、筋がわかることに重点を置いた逐語訳（可能な限り）になっている。脚註も最少限にとどめ、Appendix の方に譲っている。

○ Appendix

i 現存する『忠臣蔵』の原文は数種類あるが、その中で浄瑠璃本が最も一般的に使われている。草稿ではそれを使った。その作者は近松門左衛門とか言う人で、18世紀前半に活躍した人らしい。私は近松については知らない。私が使用した版には Seisuke という人が、一部は大阪の Funamachi (Ship street) で印刷し、また一部は江戸日本橋（大日本のロンドン橋にあたる）に近い Seto-mono-cho (Porcelain Street) で印刷したと書かれている。この本は11部から成り、草書と平仮名で書かれていて、音楽面での指示がしてある。どこで声の調子を変えるか、どこで伴奏を入れるかなど、この本には句読点が全然ついていない。（ここで Dickins は浄瑠璃がどのように詠われるのかを詳細に解説し、実際に見ていたことを納得させる。）

すでに Mitford がそのすばらしい *Tales of Old Japan* の中で「四十七士物語」を紹介しているが、それにも拘らず、その不備を補うつもりで、私は日本でたいへん人気のある浄瑠璃の流布

本から『仮名手本忠臣蔵』の翻訳をやってみたのである。

- ii ここで、赤穂事件の史実と、『仮名手本忠臣蔵』の作品を比較しながら、『仮名手本忠臣蔵』に登場する人物についてそれぞれ解説をつけている。
- iii 翻訳文の各ページには必要最少限の脚註をつけたが、物語の筋の展開を妨げることを恐れて、長い解説は Appendix に廻した。例えば「将軍」や「旗本」について。
- Appendix から見えてくる Dickins の人物像
 - i 徳川幕府の解説で、最後は静岡に隠退したことに触れ、「横浜の西方約60マイルの静岡」と横浜を基点にして、当時 Dickins が横浜に住み、横浜から出版したことを思いおこさせる。¹²⁾
 - ii 元服について。「現在その習慣はない。髪形も今は西洋風であるが、衣服は洋服まがいの珍妙な恰好のものを着ている。」当時の和服に靴などという風俗を眼のあたりに見ていた観察であろう。¹³⁾
 - iii 地理について。山陰地方の解説に、
Vide Mr. Satow's Geography of Japan, Trans. As. Soc. Jap., 1872-73. p.33
のように日本アジア協会員として活躍していたことを明らかにする。¹⁴⁾
 - iv 吉田兼好について。「平凡な並みの歌人で将軍尊氏のころに活躍した。有名な古今集に数首収録されている」と書いているが、これは誤り。兼好の作品は続千載集以後の勅撰集には入っているが、古今集に入る筈がない。『百人一首』の英訳をすでに出版していた Dickins には迂闊なことだが、当時それほど深い研究に至っていなかったことを示して興味深い。¹⁵⁾
 - v うどんげの花を調べるのに『和漢三才図会』を使っている。¹⁶⁾
 - vi 盆月について。お飾りから迎え火を焚く風俗に至るまで現場感のある描写がなされており、日本に住んで実際に見ていたことがわかる。¹⁷⁾
 - vii 神道について。Satow: "Revival of Pure Shintoism" Transactions of the Asiatic Society (1873-4 p.81) を挙げて解説。¹⁸⁾
 - viii 仏教建築について。Mr. Brunton の論文 (Transactions of the Asiatic Society, 1873-4 p.81) を挙げた。ここで注目すべきことは、金閣寺のところで、「一体に京都の寺院を褒めすぎる。最近焼失した Shiba Temple や日光の東照宮に比すべきものなど京都にはない」と言う。Dickins の審美眼を示して興味深いところだ。¹⁹⁾

最後のところで最初の『忠臣蔵』英訳は、1870年10月 *Westminster Review* に掲載したこと、この再版に当っては注意深く推敲したことを述べてしめくくっている。

1866年ロンドンに帰国するや、ただちに出版した『百人一首』の英訳が、全然改訂されることなく、再版され続けたことを考え合わせると、『忠臣蔵』の英訳が版を重ねる度に改訂されたことは注目すべきことである。Dickins が『忠臣蔵』にそれほど執着したのは何だったのだろうか。

○ Book the Eighth の浄瑠璃の英訳

筋の流れが妨げられるのを恐れて、巻末の Appendix に廻したこの韻文訳は、『百人一首』の場合のように脚韻を踏んだ弱強調 iambic metre で 4 詩脚か 5 詩脚のものが多い。中には 6 詩脚のものも入っている。

○ 謡曲「高砂」の訳 *The Ballad of Takasago*

どうして「高砂」の訳が、『忠臣蔵』の訳本の Appendix に入っているのだろうか。

1906年出版の *Primitive & Mediaeval Japanese Texts* の訳とは全く違う。²⁰⁾ 『忠臣蔵』の場合のように、ここで一度試訳を出しておいて、推敲を重ね、1906年の決定版を *Primitive & Mediaeval Japanese Texts* に収録したのであろうか。1906年の版では南方熊楠の手が入っているが、まだこの時は二人の出会いに至っていない。²¹⁾ この「高砂」の訳の脚注に a spirited translation of the above appeared

in the *Japan Weekly Mail* of March 10th, 1875, on the basis of which the following version has been attempted.²²⁾とあるので、この訳も二度目の挑戦であつたらしい。

○「高砂」の変体仮名文字原文

『忠臣蔵』と同じように、「高砂」もここに収められている変体仮名文字を読み解いて、英訳したことがわかる。W.G. アストンが『日本文学史』の中で「我々はアーネスト・サトウ、ミットフォード、チェンバレン、ディキンズその他の人々の翻訳によって、日本文学を部分的には興味深く覗いてきているが、しかしいまだ未開拓のままの原野が広く手をつけられずに残されている」²³⁾と言ったのは1899年のこと、Dickinsが『忠臣蔵』を出して24年も経ってからであった。*Primitive & Mediaeval Japanese Texts* (1906) に収録された *The Nô, or Mime, of Takasago or Ahiohi* に付いている Introduction の中では次のように書かれている。

—Dr. Aston condemns the free use of word-plays and pivot-words — words used in two senses, one corresponding to what precedes and one to what follows. I have dealt with this matter in the Introduction to the *Manyôshû*. The word-plays are most frequent in the *michiyuki* (descriptions of journeys, recited by the protagonist or one of the actors or chorus), and bring in, often dexterously and gracefully enough, qualities of beauty or singularity, or associations, historical or other, involved in or suggested by the names of the places traversed. They resembled the *kaidô-kudari* (goings down of officials from the capital by the sea-roads) of later times, composed in debased *naga-uta* style. There is a well-known example in the *Taiheiki*, and a fairly good one will be found in the *Bridal Journey*, described in the *jôryû* known as *Chiushingura*, of which a translation ('The Loyal League') was published many years ago by the present writer.²⁴⁾

どうして『忠臣蔵』と「高砂」なのか、ここでも納得できる手掛かりは得られないが、『忠臣蔵』の八段目の浄瑠璃の英訳をしながら、日本に住んで謡われる場面の多かった「高砂」に眼が向いたのではなかったろうか。日本で実際に生活して見て、Dickins は日本人の精神構造を研究するための資料として有効な書物を選んだように思われる。先ず、最も一般的であった『百人一首』を選んで訳し、間違いなく観客を動員できる芝居として人気の高かった『忠臣蔵』を訳そうとし、謡曲の中で最も大衆性のあった「高砂」を選んだという風に思われるのである。

(4)

再版された *CHIUSHINGURA*

1912年版の *CHIUSHINGURA* の扉に次のような注目すべき記録が置かれている。

初版 横浜 1875

第2版 改訂 29枚の挿絵 Allen & Co. 1880

第3版 更に改訂を加える。8枚の挿絵 Gowans & Gray Ltd. 1910

第4版 挿絵なし June, 1912

この第4版は Gowans & Gray Ltd 出版で、第3版と同じ版元で出されたもの。挿絵なしで、薄くなっている。第1版が219ページなのに対してこの第4版は204ページの上、版も小さい。

1875年の横浜発行の初版と、1912年ロンドン発行の第4版を比べて見る。但し1875年の横浜発行の初版はそのまま、翌1876年 New York の G.P. Putnam's Sons から出版されていた。

1875, 1876版 (初)	1912版 (4)
<ul style="list-style-type: none"> ○ Introduction なし ○ Translator's Note ○ Preface of the Author ○ Book the First ○ Book the Second The <i>Rage of Wakasanoske</i> ○ Book Third The Quarrel of Yenya with Moronawo ○ Book the Fourth The Seppuku of Yenya <i>Hang'wan</i> ○ Book Eighth Translator's Note 韻文訳は物語の筋の流れを阻害するのでここには入れずに, Appendix に入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> なし ○ List of Principal Personages ○ Translator's Note (最後の3行削除) なし ○ Book the First Preface of the Author が改訂されて冒頭に移った。 ○ Book the Second The <i>Anger of Wakasanosuke</i> ○ Book the Third The Quarrel of Yenya with Moronoho ○ Book the Fourth The Seppuku of Yenya ○ Book the Eighth The Bridal Journey 筋の流れを韻文訳の前に解説し, 韻文訳を Appendix から戻してここに入れる。

以上が外観上の改訂であったが、本文中の改訂はとても述べ切れないほどある。第1ページの具体例を次に挙げてみよう。

- l. 1 Ashikaga family → l. 8 Ashikaga dynasty
- l. 2 Shogun → l. 10 His Highness
- l. 3 the country → l. 12 the empire
- l. 5 the empire → l. 16 the realm
- l. 6 Hachiman → l. 18 the War-God Hachiman

名詞の改訂だけでもこの有様であって、文章自体の改訂は枚挙にいとまがない。

Dickins と南方熊楠がロンドンで出合ったのが1896年²⁵⁾であって、その後の翻訳には必ず熊楠の手が入ったことがわかっている。²⁶⁾ 従って改訂された *CHIUSHINGURA* に熊楠の名は見当たらないが、助言が入った可能性は十分に考えられよう。

(5)

『仮名手本忠臣蔵』の英訳—その後

i *Japanese and Western Literature* by A.M. Janeira 1970

巻末の *Japanese Literature in European Languages* で見ると、次の通り

Dickins, Frederick

Chiushingura : or the Loyal League London, Allen 1880

Inoue, Jūkichi

Chūshingura, or the Treasury of Loyal Retainers

Tokyo, Nakanishiya 1910, Hakubunkan 1894

Masefield, John

The Faithful, A Tragedy in Three Acts, London Heinemann 1915

Murdoch, James

Scenes from the Chiushingura and the Story of the Forty-Seven Ronin Tokyo, K. Ogawa 1892

Shioya, Sakae

Chūshingura : An Exposition, Tokyo, Hokuseido 1940

Tanaka, Umesaburo

Forty-Seven Ronin, Tokyo, Seishido 1910

ii *Japanese Literature in Foreign Languages 1945-1990* (日本ペンクラブ発行1990) によれば

Donald Keene

Chūshingura : The Treasury of Loyal Retainers Columbia University Press 1971

iii その他

Six Kabuki Plays translated by Donald Richie and Miyoko Watanabe Hokuseido 1963

Chūshingura : Studies in Kabuki and the Puppet Theater edited by James R. Brandon Hawaii

Uni. Press 1982

The 47 Ronin Story by John Allyn, Tuttle 1970

これらの英訳を調べて見ると、『仮名手本忠臣蔵』の完訳は Dickins(1875), 井上十吉(1910), Donald Keene (1971) の3冊にすぎない。塩谷栄の *Chūshingura* は *An Exposition* の副題が示す通り解説と各段の梗概を記したものの。

しかし井上十吉と塩谷栄の忠臣蔵は参考文献には必ず入ってくる。例えば

○ Donald Keene : *Chūshingura* (1971)

Inouye, Jukichi. *Chushingura or Forty Seven Ronin*. Tokyo, Nakanishi-ya, 1910.

A good, if rather old-fashioned translation of the original play, together with an introduction describing its background.

Shioya, Sakae. *Chūshingura, an Exposition*. Tokyo, The Hokuseido Press, 1940.

A retelling of the historical events, followed by a summary of the play.²⁷⁾

○ James R. Brandon : *Studies in Kabuki and Puppet Theater* (1982)

Donald Keene, *Chūshingura : The Treasury of Loyal Retainers* (New York : Columbia University Press, 1971) : Frederick V. Dickens, trans., *Chiushingura or The Loyal League* (New York : G.P. Putnam's Sons, 1876) ; and Jukichi Inouye, trans., *Chushingura or The Treasury of Loyal Retainers* (Tokyo : Nakanishi-ya, 1910) are translations of the full joruri text. Sakae Shioya, *Chūshingura : An Exposition* (Tokyo : Hokuseido, 1956) is a detailed discussion of the play and the historical events it dramatizes.²⁸⁾

などのようにていねいに紹介されている。

(6)

井上十吉の英訳忠臣蔵

私の手元にある *Chūshingura or The Treasury of Loyal Retainers*, translated by Jukichi Inouye は東京・中西屋書店出版の第3版で1917（大正6）年発行。初版はいつなのだろうか。先に示した A.W. Janeira の *Japanese and Western Literature* の目録には博文館版の1894年と中西屋版の1910年の2冊が入っている。Donald Keene と J.R. Brandon は両方とも1910年版を採っている。第3版の Preface に次のような記載があって手掛りが得られそうだ。

Preface

Seventeen years ago appeared a translation of the *Chūshingura*, **in which I omitted three acts of the play with the object of making the thread of the story continuous.** The edition, which was a small one, was soon exhausted. I was lately asked by Messrs. Nakanishiya to touch up my old translation for republication. I have, however, taken this opportunity to make a new and complete translation of the play; and I may say that the omissions in the present translation do not exceed ten lines, if so many, such omissions being unavoidable as where the passages convey no coherent meaning or where, notably in the bantering of Yuranosuke with Okaru in the seventh act, they are too indelicate for translation. In spite of its numerous defects, I trust the present work will at least give the reader some idea of the most popular version of the most famous vendetta in Japanese history.

With a view to assist the reader to understand the spirit of the play, I have prefaced it with a lengthy introduction, in the preparation of which I received valuable assistance from Mr. Sosaku Nomura, of the Meiji Gakuin, Tokyo, to whom my best thanks are due. Jukichi Inouye

Tokyo, Japan, September, 1910

ここで言う17年前というのは多分博文館版の1894年発行のもので、それが初版に当るものであろう。先の A.W. Janeira の目録に本文81ページとあり、1910年版では269ページになっている。大幅な改訂をして第2版を出したことになり、そのまま第3版を出したのであろう。内容は次の通り。

Introduction

The peculiarities of the Japanese Language

The period of the Ako vendetta

The Tokugawa Shogunate

The Imperial Court

The Samurai

The common people

Bushido and its characteristics

“Seppuku”

Vendetta

Early years of the Tokugawa period

The otokodate

The Genroku period
The merchant class
The pleasure-quarters
The “Chushingura”
The attack in the palace
Takumi-no-kami’s death
Preparation for the revenge
The suicide of Sampei
Amanoya Rihei
The revenge
The conclusion

井上はこのように詳しい解説の Introduction を付け、忠臣蔵の背景を38ページにわたって説明している。しかしながら先行の翻訳についての言及が皆無なのは不思議である。Dickins の忠臣蔵が横浜で初めて出たのは、井上の初版より20年も前のことであつたし、Dickins の英訳はその後もアメリカやイギリスで再版されているので、翻訳を志す人がそれに眼を通さないということはあるまい。

井上の *Chūshingura* は次のような内容の構成で11段の完訳である。

Table of contents	page
Introduction	1 — 38
CHUSHINGURA	
Act i	1
Act ii	15
Act iii	33
Act iv	65
Act v	87
Act vi	105
Act vii	135
Act viii (The Bridal Journey)	171
Act ix	179
Act x	215
Act xi	251
	269

井上十吉 (1862-1929) は明治・大正・昭和初期の英文学者。徳島生まれ。徳島藩主。文久2年10月、勤王の士井上高格の二男として生まれる。明治6年12歳で旧藩主蜂須賀家から英国に留学を命ぜられ、初めてラグビー校に入って一般基礎学を修め、官立鉱山専門学校にて採鉱学を専攻する。明治15年帰朝後、偶然のことから専門と絶縁し、明治17年9月より、東京大学予備門に英語を教え、のち第一高等中学校その他で、英文学を講じ、26年6月横浜のジャパングゼット社に入社したが、日清戦役に対する反日論調に憤慨して退いた。27年外務省翻訳官に、31年公使館2等書記官に任じ、ベルギー、アメリカ、スペイン、スウェーデンの各国に駐在し、大正5年大臣官房翻訳課長心得を命ぜられ、大正7年官を辞して専ら著述と読書に没頭。大小十幾種の英和辞典及び和英辞典を編纂し、わが国の英学界に尽すところが多かった。且つ英文で日本事情を海外に紹介するなどの功績を残した。昭和4年4月

7日、68歳で没した。²⁹⁾

この経歴から見て、初版は横浜ジャパングゼット社にいた頃に出版され、年齢的には32歳のころ。再版は1910(明治43)年なので、外務省に入り外国に駐在していた時期に重なる。48歳頃になろうか。

井上の英訳はたいへん読み易い。また長文のIntroductionは忠臣蔵と日本人の精神構造を外国人に知って貰う上で大きな貢献をしたことは疑いない。

(7)

塩谷栄の忠臣蔵解説

塩谷栄は『仮名手本忠臣蔵』の翻訳をせず解説して梗概を紹介した。*Chūshingura, An Exposition* by Sakae Shioyaは1940(昭和15)年に初版、1956(昭和36)年再版が出ている。出版社は北星堂。

塩谷栄については次のような略歴がわかっている。

塩谷栄(1873—1961)は東大物理科修業の後、アメリカのシカゴ及びエール両大学にて英文学を研究し、東京高師、青山学院各教授を歴任し、晩年は駒沢大学講師などをした。³⁰⁾

著書としては『ヘンリ・ジェイムズ』(研究社英米文学評伝叢書69, 1934), 『ヘンリ・ジェイムズ年譜』(河出世界文学大系51), 『基礎英語』(東京・大学書林1948), ゴオルズワアジイの『フォーサイト物語』(新英米文学社, 英語英文学講座1934)などの他に次のような英文の著書もある。

Shioya, Sakae: Tokutomi, Kenjiro (1868-1927): *Namiko*, realistic novel, translated from Japanese by Sakae Shioya and E.F. Edgett., Tokyo, The Yurakusha 1905

Shioya, Sakae: *When I was a Boy in Japan*, illustrated from photograph. Boston, Lothrop, Le & Shepard Co. 1906³¹⁾

塩谷栄の *Chūshingura, an Exposition* の内容は次の通り。

[Preface] 日本の史実に基いて書かれた忠臣蔵は日本人の思想と精神を学ぼうとする者にとって必須の資料である。これまでに忠臣蔵の英訳は2種類出版されている。Frederick Victor Dickins(1875)のものと、井上十吉(1910)のもの。Dickinsの訳本は各段毎に物語形式で英訳されてあって、読み易いけれど解説が不足。井上訳の本は逐語訳なので、原文について正確な知識を得るには好都合。それに長文の解説もあり劇の背景が可成りわかるようになってはいる。しかしここでは忠臣蔵の最近の研究を踏まえて、先行訳の補足をしたいと思う。例えば最近の研究として最も信憑性の高いのは、福本日南の『元禄快挙録』(1909, 明治42)である。

以上がPrefaceの要約である。福本日南(1857—1921)は明治、大正期のジャーナリスト。筑前生まれ。新聞「日本」の記者として活躍。アジア問題に関心を持ち、数回フィリピンに渡る。38年「九州日報」の社長となる。41年衆議院議員。『元禄快挙録』で史論家の地位を確立したといわれている。³²⁾

[Chaper 1] 概論 赤穂の浅野事件の史実と『仮名手本忠臣蔵』との関係。実名を使つての劇化を徳川幕府が禁じたので、時代を足利尊氏の時代に移し、登場人物は『太平記』に據った。この劇は非常に長いが、当時の上演は朝の8時から夕方遅くまで続くのが普通であったので問題はなかった。忠臣蔵に関して自由に物が言えるようになったのは明治に入ってからで、その第一の成果は歴史家福本日南の『元禄快挙録』(1909)であった。

[Chapter 2] 赤穂義士—浅野の死と開城についての説明。

[Chapter 3] 赤穂義士—山科の大石と最後に仇討ちを成し遂げたことについて。

[Chapter 4] 武士精神、主人の命令に従う復讐の掟。武士の義務と切腹の習慣など。

〔Chapter 5〕 忠臣蔵の本文—その 1

Act I—Act VI まで、各段ごとの筋と解説

〔Chapter 6〕 忠臣蔵の本文—その 2

Act VII—Act XI の段ごとの筋と解説

〔Chapter 7〕 鑑賞 この劇の中で、実際に起った事件は 3 分の 1 ほどもない。筋そのものは単純だ。筋の導入部が半分を占めている。不当な行為に対する復讐がテーマだが、当時それは当然のことであつたので、特別その理由づけを強調する必要はなかつた。忠臣蔵ほど頻繁に劇化されるものもないし、そのバリエーションの多さでも類がない。洋の東西を問わず、詩と芸術を愛する人々に鑑賞を勧めたい。

なお、巻末には索引がついていて利用し易い。しかもそれが面白い。例えば㊦の項を見ると marriage in Japan 198-9、また㊧には Chikamatsu-Monzayemon, the Shakespeare of Japan 3-4 のようになっている。

(8)

Donald Keene の『仮名手本忠臣蔵』訳

「はじめに」のところすでに述べたが、『仮名手本忠臣蔵』の完訳としては、Dickins (1875)、井上十吉 (1894) に継いで三番目のもの。

その後出ていないので現在最も新しい翻訳ということになる。現在、忠臣蔵は日本のみならず外国でも上演される人気演目の最上位に置かれているが、1971年版の Donald Keene 訳 *Chūshingura: The Treasury of Loyal Retainers* (New York) がその土台にあることは間違いない。

Keene はこの翻訳本を三島由紀夫に捧げた。内容は① Forward を W.T. de Bary が書いているが特筆すべきものはない。② Preface ③ Introduction を Keene 自ら書いている。26ページをわたる忠臣蔵解説の最後を次のように結んでいて印象深い。

—It would be hard to imagine two works for the theater more dissimilar than the Nō play *Matsukaze* and *Chūshingura*, but these two most popular plays of their respective theaters are both quintessentially Japanese, and both are masterpieces.

Keene が *Twenty Plays of Nō Theatre* (1970) の editor であったことを思い出す。④忠臣蔵本文の英訳 Act One—Act Eleven、⑤参考文献、ここで先に紹介したように井上十吉と塩谷栄の業績に触れて書いている。

(9)

Donald Richie の忠臣蔵

Donald Richie は *The Japan Times* の書評を担当しており、その書評には定評がある。Richie の忠臣蔵は *Six Kabuki Plays* の中の 1 部として入っている。北星堂出版 (1963) で Miyoko Watanabe との共訳。「後記」によれば、1960年の晩春、松竹中村座が New York で歌舞伎公演をした。その公演は大成功で、まさしく a real collision of East and West と言ってよいほどのイベントであつた。彼はその時の模様を臨場感溢れるタッチで書いている。このような状況下で歌舞伎 6 曲の英訳をしたというが、今までの忠臣蔵の英訳とは明らかに異なっている。つまり上演されることを念頭に置いている訳で、その構成は次の通り。

- Scene I 鎌倉八幡宮の場
 Scene II 宮殿松の間
 Scene III 判官切腹の場
 Scene IV 判官館の門前——curtain

判官切腹のあと、由良之助は判官の遺言を心に秘めて、血に染まった短刀の切先を眺め、思い入れをしながら花道を去ってゆく。ここで幕となる。

(10)

James R. Brandon 編集の忠臣蔵研究

Chūshingura : Studies in Kabuki and the Puppet Theatre edited by James R. Brandon は Hawaii 大学出版 (1982) の本格的な忠臣蔵研究書である。その中に、忠臣蔵 *The Forty-Seven Samurai* の英訳が入っているが、たくさん名場面の写真を収めていてこれこそ上演を主目的として翻訳されている。

Contents

Perface	
Variations on a Theme: <i>Chūshingura</i>	
Donald Keene	1
Tokugawa Plays on Forbidden Topics	
Donald H. Shively	23
A Musical Approach to the Study of Japanese <i>Joruri</i>	
William P. Malm	59
The Theft of <i>Chūshingura</i> : or The Great Kabuki Caper	
James R. Brandon	111
<i>The Forty-Seven Samurai</i> : A Kabuki Version of <i>Chūshingura</i>	147
Contributors	223
Index	225

著者の紹介が巻末の Contributors に詳しく記載されており、それぞれその道の碩学が総力を挙げて書き上げた大著であることがわかる。*The Forty-Seven Samurai* の解説によると、1978 (昭和53) 年9月から1979年3月の間に、歌舞伎役者二代目中村又五郎が『仮名手本忠臣蔵』の公演を、ハワイ大学で行う準備をすすめていたとの事である。この翻訳はその時の3時間公演に使うためになされたものなので、舞台を念頭に置き訳した。従って先行訳とは異なるだろうと断っている。

- Act I Scene 1 Hachiman Shrine
 Scene 2 Bribery and Rendezvous
 Scene 3 Pine Room
 Act II Scene 1 Fugitive Travel
 Scene 2 Hangan's Suicide
 Scene 3 Outer Gate
 Act III Scene 1 Ichiriki Brothel
 Scene 2 Vendetta

脇道にそれるところは省略して一直線に仇討ちに進む。上演時間3時間で『仮名手本忠臣蔵』のすべてを演ずるのは無理であったろう。

おわりに

『百人一首』の完訳(1866)を初めて成し遂げた Dickins は、日本学研究にとってこれまた重要な『仮名手本忠臣蔵』の完訳(1875)に挑戦し、改訂を重ねたのであった。浄瑠璃本の変体仮名文字を読み解くという困難な仕事を見事に克服した Dickins は、Satow や Aston, Chamberlain, そして Arthur Waley にも劣らぬ語学の天才であったに違いない。Dickins の *Chiushingura* が基礎にあって、最近の James R. Brandon の編集になる *Chūshingura* のような本格研究に至り着いたのである。この事を忘れてはなるまい。

『忠臣蔵』は日本研究のためばかりでなく、演劇としても優れている故に、絶えず求められ、上演されるのであろう。*The 47 Ronin Story* (by John Allyn Tuttle Co., 1970) のような 四十七士物語を土台にした歴史小説も書かれている。

Richie や Brandon の *Chūshingura* でわかるように、海外の忠臣蔵は、単なる鑑賞から学問と技術の両面にわたる研究へと進んでいるらしい。ここでも東西文化の真剣な衝突によって、新しい演劇分野を切り拓こうという姿勢に移行しつつあるようである。

註

- 1) 一誠堂古書目録76号 p. 255
- 2) 岩波・西洋人名辞典
- 3) Transactions of the Asiatic Society of Japan, Introduction p. 4
- 4) 『パークス伝』 p. 366
- 5) 『TANKA の魅力』 p. 237
- 6) *Chiushingura* (1876), p. 185
- 7) *Chiushingura* (1876), Translator's Note p.7
- 8) Transactions of the Asiatic Society of Japan, Introduction p. 7
- 9) 岩波・西洋人名辞典
- 10) 『マリア・ルス事件—大江卓と奴隷解放』 pp. 86-91
- 11) 『歌舞伎名作選』第一巻「仮名手本忠臣蔵」を採用。
- 12) *Chiushingura*, Appendix p. 161
- 13) *ibid* p. 164
- 14) *ibid* p. 164
- 15) *ibid* p. 165
- 16) *ibid* p. 166
- 17) *ibid* p. 168
- 18) *ibid* pp. 170-178
- 19) *ibid* p. 180
- 20) 流通経済大学論集 vol., 28, No. 2, 1993 pp. 43-49
- 21) *ibid*
- 22) *Chiushingura*, Appendix p. 207
- 23) アストン『日本文学史』 p. 6
- 24) *Primitive & Mediaeval Japanese Texts* pp. 395-6
- 25) 『TANKA の魅力』 p. 171
- 26) 流通経済大学論集 vol., 28, No. 2, 1993 pp. 11-55
- 27) Donald Keene: *Chūshingura* pp. 181-2
- 28) James R. Brandon; *Chūshingura* p. 151
- 29) 日本人名大辞典

- 30) 昭和人名辞典 vol. I
- 31) *The National Union Catalogue, Pre-1956*
- 32) 日本人名辞典

参考文献

1. 『パークス伝』 F.V. ディキンズ (高梨健吉訳) 平凡社 1984
2. 『仮名手本忠臣蔵』 歌舞伎名作選集第一巻 (戸板康二編纂解説) 創元社 1955
3. 『仮名手本忠臣蔵』 服部幸雄編著, 白水社 1994
4. *Primitive & Mediaeval Japanese Texts* by Frederick Victor Dickins London 1906
5. *Chūshingura or the Royal League, A Japanese Romance* translated by F.V. Dickins 横浜 1875, New York 1876
6. *Chūshingura or the Royal League, A Japanese Romance* translated by F.V. Dickins London 1912
7. *Chūshingura or the Treasury of Loyal Retainers* 3rd edition translated by Jukjichi Inouye 中西屋 1917
8. *Chūshingura, An Exposition* by Sakae Shioya 2nd edition 北星堂 1956
9. *Japanese and Western Literature* by A.M. Janeira Tuttle Co. 1970
10. *Japanese Literature in Foreign Languages 1945-1990* The Japan P.E.N. Club 1990
11. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* First Series (復刻版) 雄松堂 1964
12. A.B. Mitford: *Tales of Old Japan* 1871 reprinted by C.E. Tuttle
13. *Chūshingura, The Treasury of Loyal Retainers* translated by Donald Keene, Columbia University Press 1971
14. *Chūshingura, The Treasury of Loyal Retainers* translated by Donald Keene C.E. Tuttle 1981
15. *Six Kabuki Plays* translated by Donald Richie and M. Watanabe 北星堂 1963
16. *The Tale of Forty-Seven Ronins* by Mitford 内田老鶴圃 明治25年
17. *The 47 Ronin Story* by John Allyn C.E. Tuttle 1970
18. *Chūshingura, Studies in Kabuki and the Puppet Theater* edited by James R. Brandon, University of Hawaii Press 1982
19. *20 Plays of the Nō Theater* edited by Donald Keene, Columbia University Press 1970
20. アストン『日本文学史』(川村ハツエ訳) 七月堂 1985
21. 『TANKAの魅力』川村ハツエ著 七月堂 1992
22. 『西洋人名辞典』岩波書店 1981
23. 『日本人名辞典』新潮社 1991
24. 『忠臣蔵』松村栄一著 岩波書店 1964
25. 『マリア・ルス事件—大江卓と奴隷解放』武田八洲満著 有隣新書 昭和56年
26. 『歌舞伎美論』東京大学出版会 1989
27. 川村ハツエ「Dickinsと竹取物語」(英学史研究 No. 26 1993)
28. 川村ハツエ「Dickinsの英訳百人一首」(英学史研究 No. 24 1991)
29. 『南方熊楠日記』(八坂書房1987)
30. 『日本の英学100年』明治篇 研究社 1968
31. 『日本英学史の研究』豊田實著 千城書房 1963

F.V. DICKINS (1838-1915) AND *CHIUSHINGURA*

Hatsue Kawamura

My previous articles treated F.V. Dickins's works on Japanese literature such as his translations of *Hyak-Nin-Is'shiu* (1866), *Taketori-Monogatari* (1888), *Ho-Jo-Ki* (1905) and *Primitive & Mediaeval Japanese Texts* (1906).

This paper is a study of his translation of *Chiushingura*.

Donald Keene (1922-) published the translation of Kana-Tehon-Chūshingura, titled *Chūshingura, The Treasury of Loyal Retainers* in 1971. In his introduction, Keene refers to F.V. Dickins and says that "the oldest translation seems to be the one by Frederick Victor Dickins called *Chiushingura or The Loyal League*, published in 1880."

But I found Dickins's translation published at Yokohama in 1875, at Toyo-Bunko Library in Tokyo, which keeps later editions of the book as well. In the fourth edition (1912), Dickins says as follows:

First Edition, Yokohama, 1875.

Second Edition, Revised, with 29 illustrations (Allen & Co.) 1880.

Third Edition, with some further Revision, with 8 illustrations (Gowans and Gray, Ltd.), July, 1910.

Fourth Edition, unillustrated, June, 1912.

This means he published the book in Yokohama five years before he did in London. The translation Keene referred to was the 2nd edition. Dickins came to Japan for the first time in about 1861 as a medical officer with the British Navy, and went back home in 1866. Around 1870 he came to Yokohama again as a lawyer. He was a member of the Asiatic Society of Japan from the time of its foundation.

Before Dickins, the story of the *Forty-Seven Ronin* had been known to the English readers through Mitford's *Tales of Old Japan* (1871). But Mitford's book was not the translation of Kana-Tehon-Chūshingura. It was his story of Ako warriors' retribution. Of the translation of Kana-Tehon-Chūshingura, there are only two besides Dickins's. One is Jukichi Inouye's (1894) and the other, Donald Keene's (1971).

F.V. Dickins, the Japanologist, is not so well known, both here and abroad, as B.H. Chamberlain, W. G. Aston and E. Satow. He should be reinstated to the rightful position he deserves.